



夢☆未来プロジェクトと道徳教育

校長 赤尾 眞司

東京都教育委員会では、オリンピック・パラリンピック教育推進事業の一環として、『夢・未来プロジェクト』を実施しています。この事業は、アスリートを学校に派遣し交流することで、児童のスポーツへの関心を高め、夢に向かって努力したり、困難を克服したりする意欲を養うことを目的としています。

本校は、11月21日（土）にパラリンピック陸上競技の高橋 勇市選手をお迎えして実施しました。高橋選手は、視覚障害の陸上競技・マラソン選手で、2004年のアテネパラリンピックのマラソン金メダリストです。現在も競技を続けていて、様々な国内外の大会で活躍されています。来年に延期された東京パラリンピックでは、トライアスロンに挑戦されます。

高橋選手からは、全校児童に、努力することの大切さやパラリンピックへの思いなどのお話がありました。全校向けにはZOOM画面を通してのお話になりましたが、真剣な表情で聞く児童が多くみられました。その後、6年生とふれあいの時間を持ち、視覚障害者がどのように歩くのかアイマスクを付けて体験をしました。6年生は最後に金メダルを間近で見せていただき、感激でした。

高橋 勇市 選手のお話

小学校5年生の時、校長先生が児童の体力を向上させるために考えて、みんなで校庭を走るようになりました。みんなと走るようになると、なんとなく楽しく思えてきました。2、3ヶ月後には、一人でも黙々と走っていました。5年生の時に重い病気にかかって3ヶ月学校を休みました。病気が治って登校してすぐの運動会では、かけっこでビリになり、悔しい思いをしました。みんなを見返してやる、6年生では1位になるという気持ちで、また中休みに走り続けました。6年生の運動会では、かけっこで1等になりました。一番速かった子に勝ってゴールテープを切ったときの満足感と達成感が忘れられません。オリンピックの100mの選手になろうと思いました。

高校に入学した時の健康診断で目の病気が見つかり、医者からは20歳で失明するから今から準備をするように言われました。だんだんと目が見えにくくなり、大縄跳びでは縄が見えない、跳び箱ではぶつかってしまいました。友達には目が見えないからとは言えませんでした。目が見えないことは恥ずかしい、カッコ悪いと思っていました。高校卒業後、自分の部屋に閉じこもることが多く、自分の人生について考えました。みんなに迷惑をかけているのではないかと、一人で生きていけるのか不安になりました。でも、母親の言葉から、体の不自由な人がみんな生きている、頑張って生きていこうと考えるようになりました。

その後は、盲学校に通い、点字の勉強や杖の練習をし、マッサージ師の免許を取って就職しました。働き始めて、アトランタパラリンピックで日本人が金メダルを取った話を聞きました。パラリンピックが体の不自由な人のオリンピックと知り、6年生で1等をとったときの感動を味わいたい、自分も金メダルを取れるかもしれないと思い走り始めました。はじめは、点字ブロックの上を杖を使って走りましたが、人や電柱にぶつかってしまいます。「いっしょに走ってあげますよ」という人に励まされ、ひもをもって走るとうまく走れることもわかりました。おかげで、アテネパラリンピックでは金メダルが取れました。金メダルを取ると欲が出ます。その後も何度もパラリンピックに挑戦してきました。来年はトライアスロンで東京パラリンピックに挑戦します。応援をよろしく。（講演の内容を要約しました）

40分ほどのお話でしたが、子供たちは高橋選手の努力する姿、頑張ろうとする力を感じたのではないのでしょうか。そして夢に向かって努力することの大切さを実感できたと思います。

学校では、自分を見つめ、他者を思いやる心を育てるために、道徳教育を大切にしています。今年度は道徳公開講座が開催できませんので、学校での道徳教育を2・3ページにまとめました。

子供たちが豊かな心を持ち、元気にのびのびと成長していくためには、学校での道徳教育と共にご家庭でのご協力が不可欠です。日常生活で、子供たちの行動に対して話をする機会をもってください。親の価値観を押し付けるだけでなく、子供の話をよく聞き、子供の考えを認めてあげることも必要です。様々な考え方があることを実感することが、子供たちの心の成長につながります。

「夢・未来プロジェクト」と道徳の授業

先日、「夢・未来プロジェクト」で視覚障害者の高橋勇市選手が ZOOM で全校児童にお話をしてくださいました。子供たちは、高橋選手のお話を聞いて、努力をすることの大切さや強い意志をもって取り組むこと、そして家族や支えてくれた人たちへの感謝の気持ちを感じました。お話を聞いた子供たちは、メダリストが自分たちに話しかけていることを実感したことで、共感したり尊敬したりする貴重な体験ができたと思います。道徳の教科書にもプロのアスリートを教材にしたものがあります。5年生の「世界最強の車いすプレーヤー～国枝慎吾～」です。国枝選手の困難があっても諦めない姿を通して、自己の生き方について考えます。本校の児童は、高橋選手の話を知ることができたので、教科書を使って考えるよりもさらに深く考えるきっかけになったと思います。しかし、今回のような機会をいつも設けることはできません。ですから、このような体験がなくても、誰もが考えることができるように授業をします。また、障害者という視点からだと、3年生では「みんながくらしやすい町」、4年生では「思いやりのかたち」の学習を通して、今まで気付かなかったところに目を向けることができるようにしています。

私は、「夢・未来プロジェクト」のときの高橋さんの話を聞いてすてきだなと思ったことがありました。それは、目が不自由になってしまってもあきらめずにずっと走る練習をしていたのがすてきだなと思いました。夢をあきらめずにがんばって金メダルをとることがすごいと思いました。しかし、次のパラリンピックでは、金メダルにはとどきませんでしたが、あきらめずに走ったり、新しいことを始めたりしていて「やっぱりすごい」と思いました。自分も走ることが好きなので、高橋さんに話をしてもらってもっと自分もがんばりたいと思いました。もし、自分が目が不自由だったら、とっくに走ることをあきらめていたと思います。高橋さんは、あこがれるすてきな人です。

児童の感想から（一部抜粋）

今、道徳教育が大切なのは

子供たちが生きていくこれからの時代は、グローバル化、情報技術革新等により、一人一人がその変化に対応していかななくてはなりません。このように、変化の激しい社会を生き抜くためには「社会生活に必要な基本的学力やルールを身に付けること」「自分を見つめ、他を受け入れること」「たくましく生きるための健康や体力を増進させること」の3つの力が必要です。この3つの力を備えることが子供たちの将来に大きく関わってきます。

特に、「自分を見つめ、他を受け入れること」は、道徳性に深く関わってきます。自分勝手なことをしていたのでは、社会生活を送る上で、大きな障壁になります。自己を見つめ、他の人の考えを受け入れたり共感したり、時には納得するまで語り合うことで、お互いの関係性が深まります。

また、自然や命の神秘に触れ、感動する心をもつことは、人間が便利さばかりを優先したり、利己主義的な考えばかりに陥ったりしないためにも大切なことです。子供たちが学んでいる道徳は、人間としての在り方や人としてよりよい生き方をするためにはどうしたらよいかを考えることと、将来他人

生きる力

社会生活に必要な基本的学力やルールを身に付けること

自分を見つめ、他を受け入れること

たくましく生きるための健康や体力を増進させること

と過ごす中で、自分のわがままを押し通すのではなく、自分をコントロールし、人と協調し、思いやりをもって接することができるような素地を形成するためのものです。さらに、自分が人や社会と関わりながら快適に暮らすためにはどうしたらよいかを考えて、生活できるようになることを目指しています。

このように、子供たちが人との関わりの中で学ぶのが道徳教育です。学校での道徳教育は、道徳の授業だけでなく各教科や行事などを含む教育活動全体で行われています。

道徳の授業って、どうしてあるの？

保護者の皆様は、道徳の授業にどのような印象をおもちでしょうか。「話を読んで、感想を言うだけ」「教育番組の映像を見る時間」というような授業の印象をおもちの方もいらっしゃると思います。

道徳は、令和元年度に教科になったことで「特別の教科 道徳」（以下道徳）と名称が変わりました。教科として位置付けられた最も大きな背景には、「深刻ないじめ問題への対応」があります。いじめによって自ら命を絶つ子供たちが増加したことや、青少年による暴力行為などが社会問題になりました。この問題をきっかけとして道徳教育の大切さが強調されるようになりました。

では、道徳の授業は道徳教育ではどのような位置付けなのでしょう。道徳の授業は、「道徳教育の要」と言われています。道徳の内容は、22項目ですが、その中には、「友情について考えるもの」「規則について考えるもの」など子供たちにとって身近なものから「生命の尊さ」「国際理解や国際親善」について考えるものまで多岐に渡っています。道徳の授業では、「経験したことがある身近なこと」についてさらに考えさせたり、「経験や体験が少なく今まで考えることがなかったこと」等について考えさせたりする学習を行っています。

例えば、「外国人の方と触れ合う機会が多い」という体験（道徳的体験）をする人もいれば、そのような体験が少ない人もいます。体験がある人は、外国の文化や外国の人の感じ方などを実感できますが、体験がない人にとっては、実感することは難しいです。授業では、体験の有無に限らず、教材を通して考えていくことで実体験がなくても考えることができます。また、自分の考えをもち、友達の話の聞いたりすることで、自分の考えが一層はっきりしてきます。その積み重ねが、人としてよりよい生き方を考えることにつながります。

道徳性を育てるために

道徳性を育てるために学校の教育活動と道徳の授業だけをしていけばよいかというと、それは違います。ご家庭や地域との関わりは、とても大切です。お子さんは、学校、家庭、地域の中で生活をしています。どれか一つが欠けてしまってもバランスが保たれません。子供たちは、年齢が上がるほどそれぞれの価値観をもちはじめます。口答えをしたり、話し方が乱暴になったりするのも自分なりの価値観をもち始めたからなのです。

親子で、お互いの考えをじっくり話してみてください。お子さんの考えに共感したり、時には見守ったり、受け入れたり、じっくり考えるように促したりすることが大切です。オリンピックのことや最近のニュースでもいいです。道徳の授業で考えたこと等でもいいと思います。いろいろな人の考えに触れ、それぞれがよりよく生きるための「羅針盤」を、学校と家庭と連携して形成していきましょう。

道徳教育推進教師 粟野裕子